



Japan Society of  
Youth and Adolescent Psychology

# Newsletter

第 71 号 2017 年 2 月 28 日  
発行：日本青年心理学会事務局

## ■目次

### <第 24 回大会委員長挨拶>

若松養亮：青年心理学会第 24 回大会を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

### <特集：日本青年心理学会第 24 回大会>

河野 莊子：日本青年心理学会第 24 回大会に参加して・・・・・・・・・・2

室屋賢士：青年心理学会第 24 回大会に参加して・・・・・・・・・・2

溝口 侑：日本青年心理学会 第 24 回大会に参加して・・・・・・・・・・3

加藤弘通：はじめての口頭発表・・・・・・・・・・3

### <書評>

菅谷 充：『小説・漫画・映画・音楽から学ぶ 児童・青年期のこころの理解』  
藤森旭人（著）ミネルヴァ書房（2016 年刊）・・・・・・・・・・4

### <広報>

事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・5

### <第 24 回大会委員長挨拶>

#### 青年心理学会第 24 回大会を終えて

大会準備委員長 若松養亮（滋賀大学）

2016 年 11 月 26 日（土）～27 日（日）に、滋賀大学大津キャンパスを会場に、第 24 回大会を開催し、多くの方においでいただきました。本年度は ICP2016 や香川での教育心理学会など、学会への出費の多い年でしたので、滋賀という土地のマイナーさとも相まって、参加者が少なくなるのではと危惧していました。そこで、大会準備委員会企画に知恵を絞ったり、大会の公式サイトを作成して参加者の便を図ること、予約参加の払込期間をできるだけ長くするといった工夫を凝らし、なんとか 100 名を超える参加者においでいただきました。

青年心理学会は、私は前身の研究会時代から参加させていただいていますが、なんともアットホームであることと、個人研究発表などで若手を育てようという風土が特徴であると思います。反面、役職に就いたりシンポジウムで登壇するメンバーが固定化しているという見方もあるようで、会員数の伸び悩みや財政難の問題と併せて、より良い学会の姿を模索していかなければならないと考えています。年に一度の大会は、そうしたあり方を振り返り、若い人たちの力を発揮してもらう場であるとともに、「このプログラムは面白そうだから（お金はかかるけど）参加してみよう」という人たちを少しでも増やして、学会の価値を高める場でもあります。当大会は、後者の意味合いでの付加価値を高めるあり方を実現できたかなと（我田引水ですが）思っています。この学会は単に青年心理学を扱うという以上の特色をもった稀有な association です。その良さを今後とも守り、高めていってほしいと思います。

最後に、登壇してくださった先生方、コテ先生の企画と交渉をしてくださった溝上慎一先生、それを支援してくださった中間玲子先生、座長などの役割をお引き受けくださった会員の先生方、協賛金を拠出くださった 6 つの企業様ならびに本学部後援会、また宿泊先の確保が難しいところをご参加くださったすべての皆様に御礼を申し上げます。

## ＜特集＞ 日本青年心理学会第 24 回大会

昨年 11 月、滋賀大学にて [日本青年心理学会第 24 回大会](#) が開催されました。大会では、青年心理学研究法セミナーや準備委員会企画講演、研究委員会企画シンポジウム、準備委員会企画ラウンドテーブル、自主シンポジウム、個人研究発表など、さまざまな企画を通して研究発表が行われ、青年研究に関する大変刺激的な議論が交わされました。これらの研究発表から大会参加者が、青年や青年期についての理解を深める貴重な機会になったのではないのでしょうか。今回は、発表者や参加者の方々から感想などをご寄稿いただきました。ご執筆いただきありがとうございました。

(担当：杉本英晴・家島明彦)

### 日本青年心理学会第 24 回大会に参加して

河野 莊子（名古屋大学）

本学会に、私は、ラウンドテーブルの話題提供者の 1 人として参加した。「青年期研究 2.0—問題意識と研究デザインのブレイク・スルーとは—」というテーマに基づき、3 人の話題提供者それぞれが、自分の来し方を振り返り、これからにどのようにつなげようとしているのかを語った。（私が言うのもおかしいが）発表者の個性がにじみ出る興味深いラウンドテーブルになったと思う。また、フロアから最後に出た「青年を研究しつつけた研究者が青年ではなくなったとき、研究姿勢や研究視点はどのように変化するか」との問かけは印象的だった。私には、研究者個人の内的発達と、その研究者ができる青年理解の範囲は連動しており、それこそが青年期研究の奥深さだと思えるからである。

青年の研究を始める時、たいていの人は青年である。青年に興味を持つきっかけは、個人的経験だったり、長年抱えている疑問だったり問題だったりさまざまなが、まさに、生身の青年としての研究者が、自分自身の一部ともいえるような調査対象者について考えるという構造で研究がデザインされる。しかし年を経ると、青年期特有のあの感覚は「そんなこともあったわねえ…」と回顧の対象となり、調査対象者としての青年との一体感は薄れていく。では代わりに、研究者は何を得るのだろうか。私は、「青年を取り巻く環境への研ぎ澄まされた感覚」だと考えている。青年個人だけでなく、環境あるいは両者の相互作用も視野に入れた研究は、青年そのものを理解することだけではなく、青年がよりよく生きるための社会や環境を整えることにも貢献できよう。研究者の内的発達にともなって、可視範囲は広がり、最終的には、より普遍的で現実に近い、生きた存在としての青年に迫ることができる、それが青年ではない研究者が青年を研究することの意義である気がする。

その後の懇親会も楽しかった。先生方や友人たちと久しぶりに会うことができ、懐かしいと同時に肩の荷が一部下りたような気がした。「学生(青年)の時って、なんだかんだ言っても楽しかったよなー。気楽だったし」そんなことを思う時間をもらったひと時だった。

---

---

### 青年心理学会第 24 回大会に参加して

室屋 賢士（龍谷大学大学院）

この度、日本青年心理学会第 24 回大会にて、「大学生における個人的神話とリスクテ

イキング行動との関連について」というテーマで発表させていただきました。口頭発表で且つ 45 分という長い持ち時間で発表させていただける機会は非常に貴重で、発表内容に関する質問やご意見、ご指摘が絶えず、そのどれもが目から鱗でした。発表者の研究をより良いものにしていこうという気概を感じ、発表者としてはありがたい限りでした。また、他の先生方の発表やシンポジウムでは、発表内容はもちろん、フロアの先生方が指摘されるポイント等が非常に勉強になり、大変刺激になりました。さらに、懇親会やその後のお酒の席でも多くの先生方とご歓談させていただき、楽しい時間を過ごすことができました。

さて、本大会ではもう 1 つ嬉しいことがありました。実は私、2 年前の大会でも発表させていただき、多くの先生方から貴重なご意見を頂戴していました。本大会でお会いした何名かの先生から、私の研究している個人的神話について「面白いテーマ」、「興味がある」といったお言葉をいただきました。私としては興味を持っていただけたことももちろん嬉しかったのですが、まずは覚えていただいていたことに対して非常に嬉しく思いました。興味を持ってくださっている先生方に少しでも還元できるように、邁進していきたいと思います。

最後となりましたが、発表の機会を与えてくださった先生方、座長をしてくださった山田剛史先生、貴重なご意見やご指摘をくださった先生方、拙い発表を聴いてくださった先生方、ニューズレター執筆の機会をくださった先生方に心より感謝申し上げます。

---

---

## 日本青年心理学会 第 24 回大会に参加して

溝口 侑（京都大学大学院）

このたび、青年心理学会に初めて参加させていただきました。学会というともっと大規模なものをイメージしていましたが、セミナーやラウンドテーブルが講義室で行われるような規模の大会で驚きました。日頃、論文を読ませていただいている偉大な先生方がすぐ側にいらっしゃるというのは貴重な体験でしたし、緊張もしました。

初日のラウンドテーブル『青年期研究 2.0—問題意識と研究デザインのブレーク・スルーとは—』では 3 人の先生方のこれまでのご経験や研究の発展のさせかたについて貴重なお話をお聞かせいただきました。これから自分がどのような立場に立って研究をしていくのか、リサーチ・クエスチョンを立てて行く上で非常に勉強になりました。またジェームズ・コテ先生のご講演は、事前勉強会にも参加する機会をいただき、理解を深めることが出来ました。青年期の研究をしていく中で“Emerging Adulthood”という概念にどのように向き合うのか、改めて考えたいと思います。

2 日目の口頭発表は、以前に参加した大学教育学会と比べて発表とディスカッションに長い時間が割かれ、その中で議論が深まっていくことを感じました。今大会では残念ながら私は発表することは出来ませんでした。他大学の発表する学生の方々に会い刺激を受けることも出来ました。次回は是非発表者として参加し、自分の研究について先生方と議論をさせていただきたいと感じました。同じ青年期ということに関心をもちながらも様々な研究発表があり、研究の新たな視点をもらうことも出来ました。

最後になりますが、ニューズレターに寄稿する機会をいただきましたこと、編集委員の方に深く感謝申し上げます。

---

---

## はじめての口頭発表

加藤弘通（北海道大学）

青年心理学会に入会したのは静岡大学で行われた第 13 回大会のときだったので、すでに会員として 10 年以上のキャリアを有しているのですが、今回、はじめて発表をさせていただきました。

内容は「思春期になぜ自尊感情が下がるのか？」という地味な研究であるため、いったいどれくらいの人に聞いていただけるのだろうと心配しておりました。実際、前の方の発表が終わり休憩時間にフロアに残られたオーディエンスは数名という状況で、一瞬、嫌な予感が的中したかと不安に襲われましたが、開始時には、少し盛り返して無事発表を行うことができました。また質疑の時間には、データ解釈に対する疑義や別の解釈の可能性、また実践、あるいは〈現実〉との関わりなど、かなり本質的で発展的な議論をする時間もいただきました。

最近、他の学会で発表すると、縦断研究という方法や分析方法などが注目されることが多いです。またその手の分析方法に関するワークショップも大盛況です。もちろん方法も重要だということは認識しているつもりです。しかし、個人的には「その研究によって何が明らかになったのか」、また「それが社会的にどのような意味をもつのか」ということを第一義的に学会で議論したいと思っています。

ここ 10 年の高校生の自殺の増加、社会状況の変化によって変更を余儀なくされるライフコースのあり方と若年労働者の精神衛生、貧困や格差の問題、十代で親になることの意味や離婚、虐待や様々な依存症、そして相変わらず続くいじめや不登校・ひきこもりなど、若者をめぐる課題は、挙げればきりがありません。しかし、これらすべて青年心理学が考えていかなければならない課題です。

もちろん、私の研究がこういう課題にすぐに貢献できるかどうかは分かりません。しかし〈学び〉の場としての比重が増し、ワークショップ化する近年の学会のなかで、久々に内容を議論することができた今回の青年心理学会は、改めてこういう課題を考えることができた収穫大な学会でした。

---

## <書評>

### 『小説・漫画・映画・音楽から学ぶ 児童・青年期のこころの理解』

藤森旭人（著）ミネルヴァ書房（2016 年刊）

すがやみつる（京都精華大学／マンガ家）

いま 66 歳の私が初めて心理学の世界に触れたのは、早稲田大学人間科学部 e スクールで初めて社会人学生になった 54 歳の時のこと。必修だった心理系の科目を手当たり次第に受講したが、その中で相性の悪かったのが臨床心理系の科目だった。フロイトをはじめとする精神分析の世界にも興味はあったが、まるで頭に入ってこなかった。その理由の一つは教科書にあった。長年、学習マンガを多く手がけていたこともあり、教科書に指定される学術書や専門書が「難しい」と感じてしまったからだ。学術書や専門書に易しさを求めるのは間違いという意見もあるだろう。しかし、初学者が読む教科書的な本であれば、やはり何よりも「わかりやすさ」が最優先されるべきではなかろうか。そのような観点からみると、本書の「わかりやすさ」は群を抜いている。あれほど呻吟したフロイトをはじめとする精神分析の流れがストンと腑に落ちるようで、帯の「ここまでわかりやすく」という推薦の言葉も、けっして誇張ではない。

だが、本書の白眉は第Ⅱ部にある。「小説・漫画・映画・音楽から学ぶ」というよりも、「小説・漫画・映画・音楽を題材に、精神分析の理解を深める」という表現の方が的確に思えるが、欧米のメディア・リテラシー教育に見られるとおり、ポップカルチャーを教材にすることは、若い学生の興味を惹きつけ、理解を促進することだろう。ただし問題もある。それは、ここに紹介された作品を先に鑑賞していないと、解説の内容が十分に理解できないことだ。今回、未読だった小説と漫画に目を通しておいたおかげで、これらの作品を通じた解説の理解は進んだが（しかも面白かった）、映画作品を見る時間までは取れなかった。そのような意味で、本書は、心理学の授業で作品鑑賞にも時間をかけながら、何回にも分けて読み進めるのが適しているのだろう。

最後に、漫画家および大学で漫画を教える教員としての立場からは、本書を「キャラクター作り」としてテキストとしても使ってみたい。キャラクターといえば「絵」のこ

とだと思って「見た目」ばかりに気を配る学生たちに、心理学用語でのパーソナリティ（人格・個性・気質）を持つ「厚みのあるキャラクター」を創造してほしいからである。

◎[すがやみつる](#)プロフィール（非会員）

京都精華大学マンガ学部キャラクターデザインコース教授。マンガ家であり小説家。著作は漫画・小説・実用書を合わせて 200 冊ほど。心理学の研究書として『[ビジュアル・ナラティブとしてのマンガ：マンガ／小説／映画の中の視点から](#)』（共著，[ratik](#)，2015）がある。

---

---

<広報>

事務局からのお知らせ

I. 2017 年度大会のご案内

次年度の大会（25 回大会）の詳細につきましては，1 号通信を送付してお知らせします。ここでは，開催場所と日程等のみ先にお知らせします。

開催日程：2017 年 11 月 25 日（土）～26 日（日）

開催場所：[岐阜聖徳学園大学（岐阜キャンパス）](#) 岐阜県岐阜市中鶯 1-38

アクセス：JR 岐阜駅，名鉄岐阜駅より岐阜バス「岐阜聖徳学園大学」「岐阜流通センター」「墨俣」行き乗車，「六条大溝町」下車，徒歩約 5 分。

準備委員長：高村和代（岐阜聖徳学園大学教育学部）

II. 学会メーリングリストの配信をご確認ください

現在，電子版ニューズレターや大会・研究会などの案内を，学会メーリングリストと学会ウェブサイトによって配信しています。事務局に登録されているメールアドレスが古くなっている等の理由で，配信されずに戻ってくるメールが数十件ございます。上記のメールが届いていない方は，事務局にお問い合わせのうえ，今お使いのメールアドレスを教えてください。事務局名簿とあわせて登録情報を更新します。

学会ウェブサイト：<http://www.gakkai.ac/jsyap/>

事務局メールアドレス：[seinenshinri@gmail.com](mailto:seinenshinri@gmail.com)

会員であれば，青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を，このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上，事務局からのみの発信となりますので，事務局に送信内容をお送りください。是非ご活用ください。

\*\*\*\*\*

日本青年心理学会 事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内

The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology

c/o Professor Shinichi Mizokami

Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University

Yoshida-nihonmatsu-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, JAPAN

T E L : 075-753-3047  
E - mail : [seinenshinri@gmail.com](mailto:seinenshinri@gmail.com)  
Website : <http://www.gakkai.ac/jsyap/>

振替口座 : 00940-6-273417  
口座名称 : 日本青年心理学会

※お問い合わせはできるだけ E-mail でお願い致します。

\*\*\*\*\*